その後の成臨丸

■5■

塚本　謙蔵

人身事故隠した関係者

体船の光栄　打ち捨てる

函館出帆の直後に、移住者四百一人を乗せた成臨丸は、函館を出帆、小樽へと向かったが、いくはくもなく泉沢村更木岬（後島宮内木古内町）で暗礁、座礁した。事故の模様を移住者取締の旧白石藩家老・佐藤郎兵衛は関係家老にあてて、次のように報告している。

（略）廿日七ツ時帆同所（函館）ヲ出発（略）死船致処延路六里程航延上磯郡泉沢村沿延之岩石ニ石船乗上ケ進退度ヲ失ヒ百方手段モ尽シ候得共所詮不相叶蒸ニ破船ニ相成（略）

これは移住の引率責任者・明治使役人林敬三郎、成臨丸運航木村万平名代・三橋万次郎らの報告とも、出帆の日付、事故の経過は一致している。ところが、函館詰杉浦裁判官が東京詰堀監事にあてた報告では、事故の日付が「二十日」ではなく「十九日」である。

…十九日小樽へ向ケ出帆、為致候処途中泉沢村ニテ破船（略）同日第六字琵琶山岸間黒測度ノ位方相失泉沢村内字更木崎ヘ被吹付及破船候ヘ共乗組人数老人モ怪我無之候（略）

とある。この異同はどこから生じたのであろうか。そのカギは後段の「老人モ怪我無之候」にある。

合流の人数まちまち

座礁した成臨丸の乗客は、泉沢に上陸後、函館に向かい、移住者は第二便と合流して成臨丸に乗船、再び目的地に向かう。杉浦裁判官だけでなく、佐藤・林・三橋の三者もそろって全員上陸を報告しているにもかかわらず、合流の段になると人員がまちまちとなってくるのである。

「佐藤保外三百九拾八人」（三橋）、「四百人員一同」（佐藤）、「同成臨丸乗組三百九拾八人」（杉浦）といった具合である。原因からの人数「四百一人」に比べて一一三人の減数である。

座礁事故に際して、なんらかの人身事故を予想させるものがある、と思った筆者は、泉沢の通船船頭近い大泉寺を訪れた。果たせるかな同寺の過去帳に次のような記録のあることを確認できたのである。

九月廿一日　元片倉家臣　苗字明治使役　山崎白石　高橋仁吉

船内でか上陸直後かは分からないが、死亡日付からみて、座礁事故と大きくかかわっていることは確かである。「同出役山崎敬三郎　直々取扱御申付」というと記も、この間の事情を物語る。

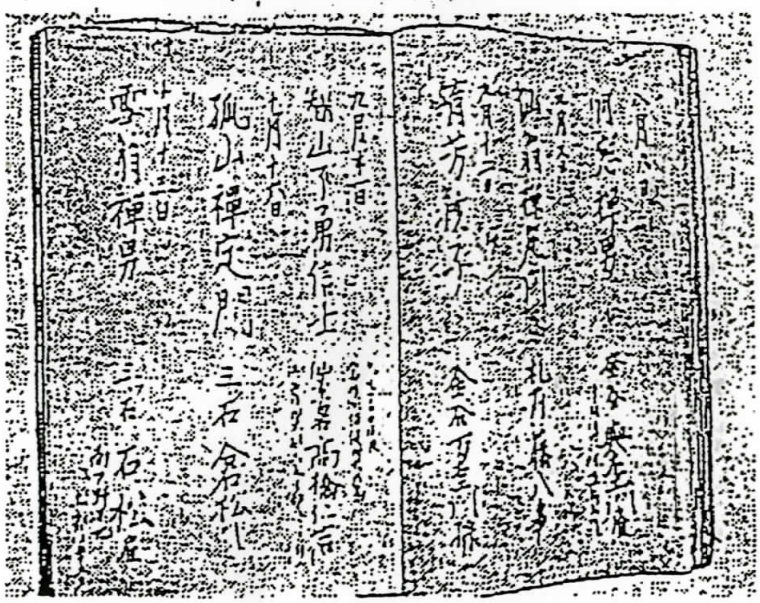
三者三様の思惑？

関係者がそろって死亡事故を隠したのは、三者三様の思惑があったからである。成臨丸を所管する明治使、その努力で生活の道を見い出した片倉家臣団、運航責任者としての木村商店。三者の利害は一致したのである。杉浦裁判官は死亡記録を採録する手段として、あえて山帰の日を一日早めたとみるのは、筆者の読み違いであろうか。

乗客に打ち捨てられた成臨丸は、二十五日明までもちこたえたが、しけはますます激しくなり「中破折船座礁其外代替二破船相成申候」（岩久庵）となった。日本人の手で初めて太平洋を渡った船・成臨丸の最後は変転することの大きかった幕末維新の時代にふさわしいものだったかも知れない。

（札幌白石高教諭・郷土史家）

■おわり■



泉沢過去帳（上）と大泉寺（木古内町）